

## 国際委員会報告

国際委員会担当理事・委員長 小野 一郎  
札幌医科大学医学部皮膚科

この度、理事長から今後の国際委員会の方針についてニューズレターに掲載するようにとの依頼がございましたので以下ご報告させていただきます。

私自身、既に数年来国際委員会担当理事ならびに委員長をつとめさせていただき、委員を担当していただいております先生達のご協力で現在まで種々な委員会活動を行って参りました。この間、前理事長の北島先生、名誉会員の塩谷先生はもとより、残念ながら昨年なくなられた大谷先生をはじめとした多くの先生のご指導とご支援を頂きながら微力ながら学会の国際化を目指しまして努力して参りました。

現在、国際委員会の委員は以前からご尽力いただいております赤坂先生、磯谷先生、貴志先生、篠沢先生に加え、本年度から京都大学の田畑先生、長崎大学の秋田先生に委員にご就任いただいております。

先日、持ち回りの国際委員会においてはまず、国際委員会の性格付け、役割を理事会で定義する必要があるとの根本的な疑問が提起されました。といいますのも数年前まではWHSやETRSへの会員の出席の機会を増やすための情報提供、さらに前理事長、塩谷先生や故大谷先生さらに現在も編集委員を務めていらっしゃる徳永先生、岡田先生のご尽力でJSWH(日本創傷治癒学会)の正式な機関誌として認定されているWound Repair and Regeneration誌(WRR)への投稿を促進することが大きな役割と認識しておりました。ところが最近のinternetの普及、海外学会へ参加する先生達の増加、さらには海外でも日本の研究者の研究が注目されることも相まって、さらに先鋭的な役割を果たさなければいけないのではとの認識を持つようになってきております。特に会員の皆様は既にご存じのように最近WRRへの本学会員の投稿数も大変に増加し、質はもとより数の上でも米国に次ぐ貢献を果たしているというのが現状です。

この面での今後の発展にご期待いただくと共に一層の会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

本学会の今後の提携のパートナーとしては、国外は既に述べたWHS、ETRSを重視し、提携するだけでなく、それらの学会で注目されている点を本学会の学術集会にも何らかの形で反映させるべきだとの認識が委員の中に多いようです。一方、国内では日本再生医療学会などとの積極的な取り組みを皆様強調しておられます。その一環として本年4月26日から29日まで米国テキサス州ダラスで開催されましたWHSの学術集会でJSWHと



NEWS  
LETTER

日本創傷治癒学会

2009.12  
No.54

### ●日本創傷治癒学会事務局

〒160-8582

東京都新宿区信濃町35

慶應義塾大学医学部外科学教室内

tel. 03-3353-1211

(内線62269)

fax.03-3353-2681

e-mail: info@jswh.com

URL: <http://www.jswh.com>

WHSの joint sessionが初めて企画されました。この試みは現理事長の黒柳先生や秋田先生のご尽力で実現したもので、昨年の学術集会で学会賞、研究奨励賞を受賞させていただきました私と長崎大学の秋野先生(実際には秋田先生代読)、和歌山大学の石田先生がParnell先生と秋田先生の座長の下、開催されました。学会1日目の早朝7:30からということもあり、参加者は50名程度では有りましたが、今後の同様なsessionを継続していくための第一歩としては大変に貴重な機会であったと認識しております。この度のダラスでは一切資金的な補助はWHS、JSWSの双方から有りませんでした。今後参加する学会員を増加させるようにつとめること、joint sessionで講演する人々には資金的な援助も大切な点かと認識しております。さらに学会HPなどでもご存じのように来年のWHSの学術集会では international sessionとして更に拡大されたsessionが企画されているようで4名となかなか狭い門では有りますが採用されると資金的な援助も提供されることですので、本学会の特に若い研究者の皆様はふるって応募いただくことを期待すると共に会員の諸先生のご協力をお願い申し上げます。また、来年度以降も同様の試みが行われるものとおもいますし、本学会でも逆にWHSやETRSから若手の研究者を招聘して講演していただくような試みを企画していただく提案をして参りたいと念じております。

また、WUWHSとの協力に関しては篠沢委員のご意見である、国際的に流布すべき日本の研究を自薦、他薦していただき本委員会で推薦できるものには援助するという案が提案されており、私も個人的には賛成です。プログラム委員として参加していただいている評議員の先生に公正に色眼鏡無しで sessionに参加させていただけるような交渉も大切と感じます。このままでは一方的にすぎるのではと

感じます。この点でも会員の皆様のさらなるご支援を心から期待いたします。

また、アジア諸国との交流も大きな課題ですがこの点につきましても現理事長の黒柳先生が以前から交流を深めてくださっている韓国創傷治癒学会(大韓創傷学会)に關しまして今まで委員会としては理事長に一任との大勢ですが、こちらも国際委員会と韓国創傷治癒学会の国際委員会で一度討議した上で特に若手研究者の交流を更に発展させる機会が有ればよいと認識しています。実際、本年度の学術集会でも両国の学会で会長の徳永先生のご厚意で研究奨励賞を受賞された若手研究者の研究成果の交換の場が企画されており、今から参加できるのを大変に楽しみにしております。

最後に以前からWHS-ETRSの合同会議が米国とヨーロッパとで交代で開催されていましたが、この度フランスのリモージュで開催された同合同会議に初めてJSWHも共催することとなりました。残念ながら今回は本学会員の参加者は10名程度でありましたが今後さらにこのような協力関係がさらに発展するとすばらしいと感じました。私自身は学術集会の講演を楽しませていただくと共に美しいフランス中央部の風景、食事そしてワインを満喫して参りました。この機会を利用していただき、その際の写真を3枚ほど掲載させていただきます。

会員の皆様の今後も更に一層のご協力をお願いいたしまして、稿を終えたいと思います。



写真1: WRR誌の編集長Hebda先生(中央)、秋田先生と私



写真2: JSWH-WHSのjoint sessionで大変にお世話になったParnell先生(中央)と私(学会懇親会にて)



写真3: 日本から参加された諸先生と共に

## WRRに会員の論文が掲載されました

会員の論文がWound Repair and RegenerationのVolume17 No.4に掲載されました。論文名、著者(筆頭執筆者または第2執筆者)は下記の通りです。

投稿規程に関しましてはジャーナルホームページ、<http://www.wiley.com/bw/journal.asp?ref=1067-1927&site=1>より入手してください。また各巻頭に掲載されておりますInformation for authorsをご参照下さい。なお、円滑な審査を行うために、2004年度よりオンライン投稿を推奨しております。

市岡 滋 先生(埼玉医科大学 形成外科)

「Determinants of wound healing in bone marrow-impregnated collagen matrix treatment: Impact of microcirculatory response to surgical debridement」

P. 492~497

安部 正敏 先生(群馬大学大学院医学系研究科 皮膚病態学)

「Mammalian Diaphanous (mDia) may be involved in the signal transduction of sphingosine-1-phosphate on developing actin stress fiber of human fibroblasts」

P. 589~597

中谷 壽男 先生(金沢大学大学院 医学系研究科保健学専攻看護科学領域)

「Relationship between lymphangiogenesis and exudates during the wound-healing process of mouse skin full-thickness wound」

P. 598~605

赤坂 喜清 先生(東邦大学医学部 病理学講座)

「Basic fibroblast growth factor induces down-regulation of  $\alpha$ -smooth muscle actin and reduction of myofibroblast areas in open skin wounds」

P. 617~625